Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-20

パーソンズの医療社会学

油井，清光

(Citation)
倫理創成講座ニューズレター,1:8-9

(Issue Date)
2003-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001699

パーソンズの医療社会学

油井清光(社会学)－「医療社会論」担当

現代社会を新たな倫理問題との関連で考える場合、様々な角度があるが、私の場合は、この倫理創成講座のなかで「医療社会論」という角度から見た医療倫理に関わる問題の検討をはじめている。

新たな倫理の「創成」の問題は、基礎理論としては、一般に新たな価値がどのようにして生成（emergence）してくるかという問題である。私の専門は社会学であるが、社会学はじゅうらい、こうした価値ないし文化的要素の生成の問題に関心をもちつづけてきた。社会学はその際、文化－社会－パーソナリティという三大要素を相互関連の相の下においてとらえるというアプローチを、開発してきたといってよい。

基礎理論としてのそのようなディシプリンの上に、とくに医療と社会とのインターフェイスという面に焦点をしぼって、どのような新たな価値が生成しうるか、あるいは生成しつつあるか、を考えるのが「医療社会論」のねらいである。こうした面での新たな価値は、通常「医療倫理」と呼ばれる新たな倫理問題として議論されているものを、その中心として含むのである。

こうした価値生成の基礎理論から、医療社会学ないし医療倫理の問題へ、というアプローチを取る場合に、ある意味で理想的な立脚点を与えるのが、タルコット・パーソンズ（Talcott Parsons, 1902-1979）の社会理論である。

パーソンズは、戦後アメリカ合衆国における社会学理論の大成者であるとともに、社会学におけるその「構造－機能主義」は、ある時期までの世界の社会学理論をリードした基礎理論であった。その後のパーソンズ理論の位置付けについては、議論の分かれるところであるが、基礎理論としての意義を失っていないという立場にたつ者も、特に近年、多くなっている。また彼が、理論とフィールドとの相互検証の場として、医療現場ないし「医療プロフェッション」を取り上げたことはよく知られている。

基礎理論としての社会学は、社会システムを「地位－役割」構造の網の目としてとらえるのだが、パーソンズは、医療現場にこうした理論を応用し、「患者役割」や、役割としての「医師－患者関係」によって、医療現場という社会システムをとらえるという独創的な観点を提示した。また医師という職業を、現代における「プロフェッション（専門職）」の典型ないし象徴としてとらえるという観点をも提起している。

今日、医療社会学と呼ばれる分野では、数多くの経験的モノグラフが発表されているが、そうした経験的・個別的な知見を基礎づける一般理論は、きわめて少なく、パーソンズの上の理論は、現在でもそうした数少ない理論的試みとして評価されている。

パーソンズの直接の弟子であるレネ・フォックス（Renée Fox）が現在この分野で活躍し、またパーソンズ理論の批判的展開によって今日の医療社会学の教科書ともいえる業績を発表しているE・フリードソン（『医療と専門家支配』）などが、この分野の中心を担う研究者として活躍している所以もここにある。さらにパーソンズ自身の業績の再評価も進んでおり、彼の最晩年の業績、『行為理論と人間の条件』（Action Theory and the Human Condition、1978）に収録されている数々の医療社会学・医療倫理関連の文献の再検討も盛んに行われつつある。例えば「『生という贈物』とその返礼」という論文（上記所収）では、彼は今日の医療現場がかかえる根本的な倫理上の難問のいくつかに応えようとしている。それらは、臓器移植、医療の技術的高度化とクオリティ・オブ・ライフとの関連（時には矛盾）、そして死に直面せざるをえない現場としての医療現場と、近・現代医療の基本的な合理主義・技術主義との根本的矛盾、といった難問である。

こうした難問に、パーソンズが具体的な回答を与えているということではない。彼は、こうした現代の根本的問題に対して、欧米におけるユダヤ－キリスト教という宗教的伝統の再検討を行いつつ、西欧的合理主義と、死をめぐる宗教的価値との双方の脱・再構築によって、現代医療が「クオリティ・オブ・ライフ」の観点から、死を迎える患者に対処しうる道を模索しようとするのである。その際、より具体的には、医療現場を中心とした各種の「倫理委員会」などに、狭義の医療従事者たちだけではなく、社会学者、心理学者、哲学者、倫理学者などがくわわり、そうした「拡大された同僚仲間」的な制度的装置が、上記のような新たな価値の模索とその制度化に貢献する仕組みを、彼は提案していた。彼は、人間社会の価値はつねに変動していくものであり、それをどのような方向に「水路づける」かということは、そこに住む人間たちの相互行為によるものである点に注意を喚起していたのである。

こうして、倫理創成講座における本授業では、パーソンズを中心とし、そこから出発しながら、ルネ・フォックスやE・フリードソンを検討し、また日本語による諸文献を随時参照しつつ、現代の医療と倫理をめぐる問題を考えようとしている。その際、参考として、日本の伝統的宗教意識やフォークロア、死生観といった問題も、避けて通れなくなる問題の一つであろう。それは、パーソンズが、欧米における宗教的伝統の再検討を余儀なくされたのと同様の理由による。こうしたアプローチは、いわば社会史的なそれとともに、この分野の問題を基本的に考える場合に、不可避となってくる方法である。

医療社会学の文献は、個別のモノグラフとしては、特にアメリカなどを中心に次々に発表され、活況を呈しているともいえる。しかし、その基礎づけとなる一般理論の発展はこれからという状況にある。したがって、こうした「医療社会論」にかかわる分野を院生諸君とともに「開発」しつつ、現代社会における新たな倫理の創成問題に、医療社会という角度から貢献しようとするのが、この授業であるということになる。